

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

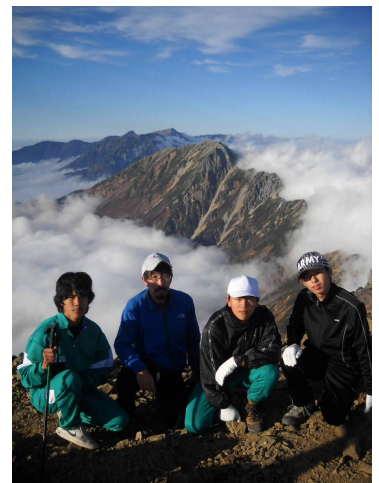
ブロッケン・雷鳥・素晴らしい景色・・・池工山岳部爺鹿島へ

山岳部の10月合宿として、一泊二日の日程で爺ヶ岳と鹿島槍へ登った。17日7時30分、扇沢着。駐車場が混んでいたのでもうろうろしていると車窓を叩いたのは山岳総合センターの山口所長。同センターの「はじめての山登り」講座で爺ヶ岳に登るのだとのことだった。当方の生徒は3名。うち一年生の2名は北アルプス初見参、テント泊、コースも鹿島槍までという違いはあるがこちらも「はじめての山登り」である。重い荷物につぶれないように、長い道のりに耐えられるようにとの思いを胸に、センターの一行に先行して出発した。

紅葉を愛でながら、11時20分に種池山荘に到着。状況によってはここに幕営ということも考えていたのだが、生徒は予想外に元気である。部長のYは、「今日中に鹿島にも登っちゃいたいですね」と意欲満々。1年生もペースを守りながらなら、なんとかついて来ている。とりあえず冷池までは行こうと、休憩を取った後、剣、立山を左手に正面には鹿島を望みながら爺を目指す。安曇野から湧いてきたガスが稜線を吹く風に遮られ山は西側半分だけが浮かび上がっている。爺ヶ岳は明日のお楽しみということにして、爺のトラバース道の先を急ぐ。13時5分、赤岩尾根分岐を過ぎ、冷池小屋の手前で小屋のオーナーである柏原さんに会う。小屋閉めを間近に控え、今日赤岩尾根から上がってきて、冷池山荘に顔を出したあと、種池山荘に向かうところだとのことだった。

13時20分、冷池につくと一年生のMが、「先生、足を攣りました」とぶったおれた。塩をなめさせて、少し休もうとテン場代を払いに行く。すると、支配人から「池工山岳部さんですか。」と声をかけられた。「そうです。」と答えると、「オーナーから連絡が入っていましたのでお待ちしていました。水代はサービスします。それから先生にはビールでいいですか？生徒さんにはビールってわけにはいかないですが、一本ずつ好きな飲み物をどうぞ。」とのこと。ありがたく頂戴する。生徒は大感激。幕営手続きをしているうちにMも復活して歩けるようになったので、テン場まで移動し、幕営する。まあ、今日はここまでかなと思っていたが、それでもとて「サブ行動で頂上まで行けそうか」と聞いて見るとMも含め全員が「大丈夫です」という。

14時15分テン場を出発。東側の谷にはブロッケンが見られた。3時、布引山で一本。少し気温が下がってきたので、防寒着と手袋を着用させる。生徒はだいぶくたびれてきてはいるが、鹿島までの最後の一登り、ゆっくりと登る。山頂直下では、ライチョウの親子が我々を待ち受けていたかのように出迎えてくれた。15時45分鹿島槍山頂に到着。山頂の景色はそれまでの疲れがすべて吹き飛ばすような素晴らしい景観だった。指呼の間にある北峰、五龍から白馬に連なる後立山の峰々、剣・立山連峰、今登って来た道を振り返ると爺から遠くは槍ヶ岳、富士山も・・・。テン場に到着したのは夕闇が迫る17時15分。針ノ木が紫色に染



まり、剣が赤く焼けている。夕食の準備をしながらしばしその美しさに手を止めた。翌18日も天気はよかった。6時にテントを撤収し、前日登らなかった爺のピークを踏み、種池経由で昨日の道に戻った。11時10分、無事扇沢到着。ちょうど山岳センターの一行がバスで帰途につくところだった。1年生にとっては、初めての本格的な山行だったが、生徒たちはよくがんばった。紅葉、柏原さんの心遣い、雷鳥、ブロッケン、夕焼け、そして素晴らしい景色、次から次へと現れた貴重な体験に歓声をあげていた生徒たちは、山の魅力を堪能できたことだろう。

笹原の美しい大川入山、来年の県大会

22日、23日と県高体連登山部の専門委員会を行なった。22日は来年度の会場となる「大川入山」の下見。集まったメンバーは県専門委員の塩川（野沢南）、久根（高遠）、矢嶋（長野工業）、大西英（塩尻志学館）、小生（池田工業）と来年の主催会場となる南信の専門委員である杉山（飯田）、池迫（赤穂）、小西（飯田長姫）の合計8名。

大川入山は、下伊那阿智村にあり、あららぎ高原スキー場と治部坂高原スキー場の両方のスキー場から登山道が開かれている1907mの山。メンバーを二手に分け、それぞれの登山口から交差縦走をした。小生は、塩川、大西英、池迫氏とともに治部坂から登った。僕は初任が飯田長姫高校の定時制だったが、若い先生が多かったので、治部坂へは始業前によく通ったものだった。当時はまだ高速が開通しておらず、実家の松本は随分遠かったが、今では松本からのアクセスは高速を使っておよそ1時間30分。

9時45分、その懐かしの治部坂を背にまずは横岳（1574m）へ向かって出発する。ここまでは急登である。そば降る小雨の向こうに紅葉の錦をまとった大川入山は、ピラミダルな山容で格好がいい。横岳からは細かいアップダウンを繰り返し、反対側から登っている別働隊と無線で連絡を取りながら、少しずつ高度を上げていく。山頂直下は美しい笹原がひろがり、紅葉とも相俟って気持ちがいい。頂上には別働隊に10分ほど遅れて12時40分に到着した。遠くはガスがかかり、遠望は利かなかったが、頂上の展望図には、北、中央、南の各アルプスが展望できるとの説明があった。

双方で情報を交換した後、僕らはあららぎ高原スキー場を目指す。いったん鞍部まで下って1820mの標高点のある尾根の分岐点まで登る途中で振り返ると、大川入山の双耳峰の二つの峰がすくと立っている。こちらから望む北側の斜面の方が紅葉の進み方は少し早い。心なしか風も冷たいような気もする。地形を精査しながらあららぎ高原スキー場に着いたのは、15時。例年に比べれば、ややコースが短いくらいはあるものの、なかなか訪れる機会のない南信の山、こういったところでの大会も悪くない。登山口と下山口が離れているので下見に入るには車回しが必要となるため、車1台ではちょっと苦しい。テント場は、治部坂から国道を2kmほどあららぎ方向にもどったところにもみじ平キャンプ場が使える。

僕は翌日、清内路峠を越えて、木曾谷経由で帰宅したが、3時間弱の道のり。例年ならもう紅葉の見頃だと思ったのだが、見頃にはまだ少し早かった。

